シリーズ戦争　子どもたちが綴った戦争体験（全5巻）

第5巻　平和な地球世界をめざして

もくじ

この本を読んでいただくみなさんへ …… 3

1　敗戦、焼土と化した日本から …… 4

疎開地で迎えた8月15日　8月15日（水・晴）／8月16日（木・晴）／戦争の一歩前は
●コラム　浮浪児／コラム　戦後の食糧難
植民地朝鮮での8月15日　S氏の手記／D氏の手記

2　新しい憲法と試練にさらされる憲法九条 …… 12

二度と戦はしないと定めた憲法九条　夕焼け空
●読んでみよう　第九条（戦争の放棄）
『あたらしい憲法のはなし』　平和祈念像
●ことば解説　長崎 平和祈念像
揺らぐ「戦争の放棄」　戦争放棄／ベトナムの戦争／湾岸戦争
●コラム　ベトナム戦争／ことば解説　集団的自衛権
日本人が行った「悪魔の行為」を忘れずに　悪魔にならないために
●コラム　九条の会

3　豊かな社会になったというけれど —私たちの生活をみつめて— …… 26

学力競争の激化　かけざん
●ことば解説　日本の高度経済成長
もっと自由がほしいんだ　もっと自由がほしいんだ／女子高校生からのメモ
平和という幸せ　平和という幸せ

4　地球世界に平和と安心を …… 36

（1）私たちに静かで平和な沖縄を返して
沖縄の子どもたちの不安　生まれた時から
沖縄米兵少女暴行事件　沖縄の訴えと日本の安全保障問題
●戦後沖縄の歴史年表
沖縄だけでない基地におびえる地域　戦争さえなかったら
（2）世界中のすべての子どもに教育の権利を　命のねだん
マララさんの国連演説　一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペンでも世界を変えられる
日本の小学生・中学生に増える不登校　ともだち／ぼくの本当の気持ち
（3）地球環境を守れ—グレタさんのメッセージ
進む異常気象
グレタさんの呼びかけ　裏切るなら許さない
●ことば解説　パリ協定
（4）東日本大震災と原発を考える
東日本大震災とその後の生活　地震や津波でこわかったこと
原発事故と放射能被害　持続可能な社会を目指して、私にできること
放射能の学習

おわりに　若い読者への伝言　—あとがきにかえて— …… 62

表紙　右　『あたらしい憲法のはなし』の表紙。
中　1972年12月7日、アポロ17号が撮影した「ザ・ブルー・マーブル（青いビー玉）と呼ばれる地球の写真。（NASA）
左　1946年、広島の青空教室のようす。（広島市公文書館編『ひろしま今昔』広島市）

裏表紙　長崎原爆資料館の屋上庭園にたつ「未来を生きる子ら」の像（ふりそでの少女像）。原爆遺族の平和への思いを京都の中学生たちがつなぎ、1996年3月にできた。（柿沼秀明撮影）

この本を読んでいただくみなさんへ

アジア・太平洋戦争で敗戦し、焼土と化した日本は、その復興に起ち上がります。子どもたちは、敗戦をどう受け止めたのでしょう。

新しい日本の進むべき方向を定めたのが「日本国憲法」（1946年公布）でした。国の主権は天皇ではなく国民に、なによりも、戦争の放棄を規定した第九条は歴史的な意味をもっていました。この九条は、歴史の節々で大きな論争になっていきます。そして、今日、憲法九条の「改正」が国会で取り上げられようとしているのです。

1960年代に入ると、日本はめざましい経済的復興をとげていきます。テレビ、洗濯機、冷蔵庫など新しい電化製品の普及、家庭にも自動車が入ってきました。たくさんの物を生産し、大量に消費していく社会が到来したのです。それを「豊かな社会」と受け止める風潮もありました。子どもたちにとってこの「豊かな社会」は、よいことばかりではありませんでした。そこでは、格差社会がひろがり、受験戦争に巻き込まれ、心を病む子どもたちが増えていったのです。

今日、私たちのまえには、日本の国内だけでなく、世界や地球に目をむけて真剣に考えていかなければならない重要な課題があります。ここでは、四つの課題を取り上げてみました。

第一は、日本にも、世界にも、数多くの軍事基地があり、とりわけ沖縄県ではアメリカ軍基地の存在によって命の危険を感じて生活せざるをえない事件が起きていることです。

第二は、世界には幼くして命をなくすたくさんの子どもたちがいて、教育を受けられない子どもたちも少なくないことです。

第三は、地球環境の危機です。気候危機による災害が多発し、温暖化を防ぐためにCO_2の排出を2050年にはゼロにすることが求められていることです。

第四は、東日本大震災の津波によって破壊された福島原発をどう考えるのかです。日本や世界に存続する原発エネルギーは、廃絶していくのか、あるいは、有効利用していくのかの課題に直面していることです。

日本の戦争の歴史を学んできたこのシリーズ最後の5巻は、これらの人類的な諸課題を調べながら一緒に考えてみることを呼びかけています。チャレンジしてみてください。

無条件降伏と聞いた時の率直な感想を書いている日記もあります。

8月16日　木　晴

東京・国民学校　六年　　女子

今朝はいつもより少し涼しいような気持ちがしたが、朝食の頃は、もういつものようにお日様が出ていた。朝食後情報があった。兼ねてうわさに聞いたように、生まれて初めて聞く本当に悲しい情報だ。それは、我日本が米英支蘇国(*)に、無条件降服をしたのだ。天皇陛下には、いろいろ御前会議をなさって大東亜戦争の終結のことをお考えになったそうだ。

おそれ多くも、天皇陛下には、大東亜戦争終結の詔書をお下しになった。そうしてラジオを通して、ほうそうされたのである。

敵は、原子爆弾を持ってやって来る。科学戦でやって来るのだ。もう私共の手でこれからはやるのだ。敵が原子爆弾で来るならばこちらでは殺人光線でもなんでも発明してやれ。宮地先生の御声もふるえていた。私たちも泣いた。これから今まで以上のくるしみが私たちの上にやって来るかもしれない。しかし、しかし私達は必ず日本を立て直すのだ。この日の朝、この感激を忘れず私共はがんばって頑張り抜くのだ。

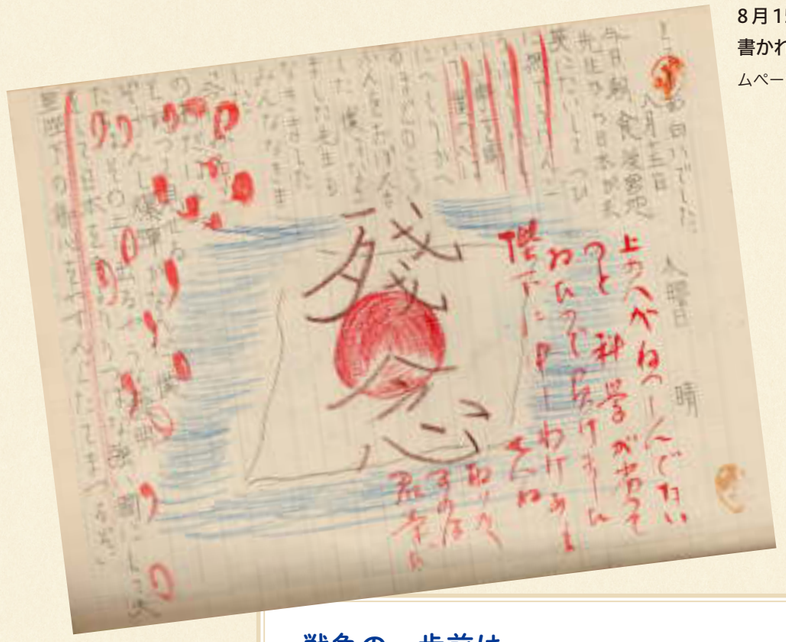
午前中「大東亜戦争終結の大詔を拝して」という題で感想文を書いた。

又防衛召集の兵隊さんが講堂に入るので運動場の方を回って行かなければいけない。お昼かぼちゃのお煮つけが出た。とてもおいしくいただけた。午後は日記を書いたり、トランプをしたりした。外では蝉がじいじいと戦争もなにもあるものかというようにあつそうになき立てている。夕食の時寺谷先生がいらっしゃった。とても御元気だった。

（『600日の記録』）

＊米英支蘇国：「支」は支那で中華民国のこと、「蘇」はソ連のこと。

この作者は、まだ、敗戦を受け入れられないでいます。先生も、「敵が原子爆弾で来るならばこちらでは殺人光線でもなんでも発明してやれ。」と声を震わせて子どもたちに語っています。子どもたちも「必ず立て直すのだ」という決意を新たにし、敗戦を受け入れるというよりは、まだまだ戦うという意思を示していました。



8月15日、5年男子の日記の絵。「残念」と大きく書かれている。（「絵日記による学童疎開600日の記録」ホームページから。平和祈念プロジェクト21提供）

この日みんなが書いたという「大東亜戦争終結の大詔を拝して」と題した感想文にはどのようなことを書いたのでしょう。読んでみたいものです。

敗戦の時、17歳であった種茂千枝子さんは、1960年代後半、42歳になって、次のような回想記を投稿しています。

戦争の一歩前は

種茂　千枝子　　42歳

私たちは信じていたのです。「この戦争が聖戦である」ことを。日本人がいっしょうけんめい戦争をすることが、東洋平和のもとになるのだと。

（略）

8月15日の放送、とぎれとぎれの放送を聞きました。戦争が終わった。日本は敗けたのだ。そんなばかなことがあるものか、いやたしかに……。今夜からは空襲がないんだ。はりつめていた気持がガタガタゆるんでいく一方、まだあの放送は敵のデマかも知れない、という疑惑がいつまでもいつまでも残りました。

戦場にある人も、内地に残った人も、死と背中あわせで暮した日々は、人間の命が何ものにもかえがたいものであることさえ、忘れさせたのでした。

戦争とは、そういうものなのです。

（略）

この戦争が誤ったものであることなど知る由もありませんでした。ごく一部の知識人だけが、戦争の危機、日本の危機を知り警鐘をならしていたでしょう。それさえ一般の国民は知らなかったのではないでしょうか。そして、暮らしが

『あたらしい憲法のはなし』

文部省（現在は文部科学省）は、学校制度が新しい６・３・３制に変わった1947年に中学校社会科のための教科書として『あたらしい憲法のはなし』をつくって生徒に配りました。それは、新憲法が子どもたちだけでなく、広く国民に読まれることを期待して作られたものでした。この『あたらしい憲法のはなし』は、憲法九条がかかげた「戦力の放棄」と「戦争の放棄」についてわかりやすく解説しています。

こんどの憲法では、日本の国が、けっして二度と戦争をしないように、二つのことをきめました。

その一つは、兵隊も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものは、いっさいもたないということです。これからさき日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といいます。「放棄」とは、「すててしまう」ということです。しかしみなさんは、けっして心ぼそく思うことはありません。日本は正しいことを、ほかの国よりさきに行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。

もう一つは、よその国と争いごとがおこったとき、けっして戦争によって、相手をまかして、じぶんのいいぶんをとおそうとしないということをきめたのです。おだやかにそうだんをして、きまりをつけようというのです。なぜならば、いくさをしかけることは、けっきょく、じぶんの国をほろぼすようなはめになるからです。また、戦争とまでゆかずとも、国の力で、相手をおどすようなことは、いっさいしないことにきめたのです。これを戦争の放棄というのです。そうしてよその国となかよくして、世界中の国が、よい友達になってくれるようにすれば、日本の国は、さかえてゆけるのです。

みなさん、あのおそろしい戦争が、二度とおこらないように、また戦争を二度とおこさないようにいたしましょう。

この解説には、憲法九条をつくった最初の考えが解説されており、二度と戦争をおこさないという熱意が読み取れます。戦争をくぐり抜けた子どもたちも平和について考え、討論をし、たくさんの詩や作文にも残しました。

『あたらしい憲法のはなし』の表紙。

武器を溶かして、列車や建物が生まれる絵で、「戦争放棄」を説明した『あたらしい憲法のはなし』のさし絵。

もっと自由がほしいんだ

子どもたちの生活から次第に自由がうばわれていったのもこの時期です。

もっと自由がほしいんだ

三重県小学校　五年　　中川　寛

「川にはいっちゃいけません」
「ハイ」
「ていぼうに行っちゃいけません」
「ハイ」
どんどんどんどん決めるだけの児童会
万が一きけんがあるからって
「いけません　いけません」
そしたら、テレビの前でねてろっていうのか
ばかみたいだ
もう　ドッチボールなんかやりたくないんだ
川にはいって魚をとって
山に行ってころがり回って
海に行っておよぎたいんだ
先生たちだって子どものころ
海でおよいだり
山に行ってわらびをとったりしたんだろう
それなのに　なぜダメなんだ
もっと自由がほしいんだ
ばくはつするようにあそびたいんだ
もっと自由がほしいんだ

（日本作文の会編『子どもたちの日本国憲法２主人公はわたしたち』新読書社、2004年）

●運動能力の推移

日本の子どもたちの運動能力は、1985年頃をピークに減退しています。50メートル走では、13歳男子をのぞくと遅くなっているのです。13歳の持久走は、計算してみると、13歳男子1500メートルでは85年に比べて98年は約27秒、2010年は約8秒遅く、13歳女子1000メートルでは、同じく85年と98年では27秒、2010年は約12秒遅くなっています。その他の種目でもほとんどに衰退が見られます。

（文部科学省「体力運動能力調査報告書」／政府統計の総合窓口（e-Stat）（https://www.e-stat.go.jp/）をもとに作成）

区分／年度		1964	1985	1998	2010
50m走（秒）	11歳男子	8.96	8.75	8.93	8.82
	11歳女子	9.30	9.00	9.26	9.17
	13歳男子	8.27	7.90	8.00	7.88
	13歳女子	8.99	8.57	8.82	8.81
持久走（秒）男子1500m 女子1000m	11歳男子	—	—	—	—
	11歳女子	—	—	—	—
	13歳男子	383.41	366.4	393.26	374.75
	13歳女子	289.49	267.11	294.11	279.39
立ち幅跳び（m）	11歳男子	—	—	168.87	167.27
	11歳女子	—	—	156.60	155.34
	13歳男子	—	—	197.86	198.26
	13歳女子	—	—	167.19	170.12
ソフトボール投げ（m）	11歳男子	33.44	33.98	29.77	30.78
	11歳女子	18.74	20.52	17.49	17.45
ハンドボール投げ（m）	13歳男子	21.11	22.10	21.89	21.93
	13歳女子	15.52	15.36	13.91	13.89
握力（kg）	11歳男子	19.40	21.08	20.98	20.30
	11歳女子	18.22	20.49	19.93	19.66
	13歳男子	27.27	31.16	31.45	31.04
	13歳女子	22.88	25.56	24.51	24.47

なんでも「ダメ、ダメ、ダメ」の生活、なんでも「ハイ」という返事が求められる学校や家庭。子どもたちの自由が制限されていきました。子どもたちは「友だちがなくなるだろう」「ゆめがなくなるだろう」「すなおじゃなくなるだろう」という叫びをあげていました。「もっと自由がほしいんだ」という子どもたちの叫びが蓄積していき、内側に爆発しそうな不満を抱えていきました。「素顔を見せないよい子たち」の誕生です。日本の子どもたちの運動能力の減退がはじまりました、

少年事件が毎日のように新聞に載るようになったのは80～90年代のことです。子どもの自殺、暴力・殺人、非行、校内暴力、家庭内暴力、いじめなど、子どもたちの心の中の「平和」が崩れはじめ、病理的な事件が多発しはじめました。

その根底には、子どもたちの中に「生きている価値はあるのだろうか」という根本的な疑問がひろがっていったことがあったのです。

(2) 世界中のすべての子どもに教育の権利を

世界の子どもたちの現実に目を向けてみましょう。世界には人間・子どものいのちが大切にされないで、放置されたままになっている国や地域があります。理由は、戦争や紛争があったり、貧困であったり、宗教の中にある保守的な価値観差別などによるものです。

命のねだん

小学校　五年　　浅見　圭亮

「5歳までに死んでしまう子が、
1年に1200万人います。」
ユニセフ協会の好光さんが言った。
かわいそうに。
好光さんは、ビーカーの水に
塩を入れ、砂糖も入れて、
経口補水塩というものを作った。
水分を補い
下痢で死ぬ子どもの命を救う。
その値段10円。
10円で命が助かる。
10円がなくて死んでいく。
たったの10円。
人の命がお菓子と同じ。
貧しい国の人の命は10円なのだろうか。
同じ人間なのにひどすぎる。

（日本作文の会・子ども委員会編『ココロの絵本5 地球ってだいじょうぶなの』大月書店、2001年）

日本に住んでいる私たちには、「人の命がたった10円」ということは実感できません。しかし、それは、世界の現実なのです。そうした中で、学校に通うこと、教育を受けることもできない子どもたちが放置されているのです。

国連で訴えるマララさん。（2013年7月、©Getty Images）

マララさんの国連演説

パキスタンのマララ・ユスフザイさん（1997年生まれ）は、2012年10月9日、15歳の時、スクールバスで下校途中、武装集団に銃撃され重傷を負いました。マララ・ユスフザイさんは、パキスタンのタリバン勢力（＊）の強い地域で、11の頃から、女子の教育を受ける権利を訴える活動をはじめました。しかし、そのことが理由で銃撃を受けたのです。マララさんは、現地で弾丸摘出手術を受けた後、イギリスの病院に移送され、一命をとりとめました。15歳の女子学生を狙い撃ちにしたテロ事件は、世界中に大きな衝撃をあたえました。

2013年7月、回復したマララさん（当時16歳）は、ニューヨークの国連本部で演説し、「すべての子どもに教育を受ける権利の実現を」と訴えたのです。

＊タリバン勢力：アフガニスタンで活動する過激組織。アフガニスタン政府や同国駐留外国軍を主な標的としてテロを実行。2021年9月、タリバン組織は、アフガニスタン全土を支配下に置き、新政権の樹立を宣言した。